

野球における通説の存在に関する研究

A study of existence of commonly accepted theory in baseball game

1K09B001-2 青木 啓

指導教員 主査 平田竹男先生 副査 中村好男先生

【背景】

野球というスポーツでは、統計的根拠のない通説がテレビの解説者のコメントや新聞記事、監督・コーチからの指導、選手同士での掛け声などに見られている。その通説が本当に存在するものかどうか疑問に思ったため、本研究を行うこととなった。自身の経験や筆者の所属する早稲田大学準硬式野球部の部員からの証言、新聞記事などを踏まえた結果、今回は「交代出場した野手のところに打球が飛ぶ」「四死球で出塁したランナーは得点しやすい」「7回は得点が入りやすい（ラッキーセブン）」の3つの通説について調査することとなった。本研究を行うにあたり先行研究を行ってみると、野球におけるゲーム分析の研究では多くの論文が執筆されていたものの、通説に関する研究はほとんどされていなかったことを確認した。

【目的】プロ野球および大学野球の公式記録を対象に調査することによって、野球界における通説の存在の有無を検証し、これまでの野球の見方を変え、戦術面・指導面において提言をする事を目的とし、本研究を行った。

【方法】

① 調査手法

大学準硬式野球部員 50 名を対象に質問紙調査を行った。研究対象となる3つの通説をそれぞれ信じるかどうか、またその通説に対して印象深い出来事を調査し通説における現場の実態を調査した。

次に、公式記録を集計・分析し、通説の存在の有無を検証した。

② 調査対象

プロ野球・2012年度セントラルリーグ公式戦504試合、および早稲田大学準硬式野球部の2009年度から2012年度までの公式戦129試合を調査対象とする。

【結果】

まず、意識調査ではすべての通説について肯定的意見が過半数を占める結果となった。特に「四死球で出塁したランナーは得点しやすい」という通説に関しては肯定的意見が全体の80%以上を占める結果となった。

次に、公式記録の集計による分析では、大学野球における「守備交代した野手のところに打球が飛ぶ」という通説、プロ野球および大学野球における「四死球で出塁したランナーは得点しやすい」という通説、プロ野球および大学野球における「7回は得点が入りやすい（ラッキーセブン）」という通説、これら3つの通説および5つのケースは全て存在するものの、実際には誤りであることが確認された。

【考察】

「交代出場した野手のところに打球が飛ぶ」という通説に関しては、通説が一般化された要因として、周囲の選手の交代した野手への注目度の高さと、交代選手自身の交代イニングへの印象の強さが考えられる。また、この通説を強く印象づけたと考えられる、第78回全国高等学校野球選手権大会決勝、松山商業高校対熊本工業高校の試合に起きた「奇跡のバックホーム」を振り返った。この通説に対しては、交代出場する選手は、過度なプレッシャーを感じる必要は全くないことを提言した。「四死球で出塁したランナーは得点しやすい」という通説に関しては、通説が一般化された要因として、投手や味方野手が四死球によって出塁したランナーに抱くマイナスイメージが、ランナーの印象をより強めていることが考えられた。この通説に対しては、投手は、四死球で出塁を許した後の走者を意識し過ぎてはいけないこと、野手は、四死球によって出塁した後の走塁を工夫することを提言した。「7回は得点が入りやすい」という通説に関しては、現代においてその通説の存在が確認されなかった理由として、時代の経過とともに投手起用に変化が見られたためであると考えられた。この通説に対しては、7回は特に注意すべきイニングではないことを提言した。

【結論】

野球というスポーツにおいて一般化されている「交代出場した野手のところに打球が飛ぶ」「四死球で出塁したランナーは得点しやすい」「7回は得点が入りやすい（ラッキーセブン）」の3つの通説は、公式記録の分析調査の結果、実際には誤りであることが確認された。そして、それぞれの通説が一般化された要因を考察し、戦術面における提言を行った。